

+ 28 【こくこく】

ぼくの村には地震（じしん）が多い。

雷も多いし火事も多いけれど、それより地震が多い。

地震のために命を落とした人も数知れません。

海が遠いから、津波（つなみ）がこないだけです。

母親にいわせると、それは大昔からで、この村の地下水に大鯰（なま
ず）が在（い）るからだそうです。

「そんなら、おおなまずを、たいじしたらええがのう」

というと、

「地下のどのあたりにいるかわからないのに、退治できるはずがないで
しょう」

と母親はいいました。

「そらあ、どこにいるか、さがすけんきゅうを、せんといかんのう」

「研究できるほど、暇な者も、頭のいい者も、この村にはいないよ」

「なるほどのう。だば、やっぱし、かいじいにたのむしかないのう」

というわけで懐爺のところに行きました。

「おおなまずは、どこにいるんかのう」

「どこにもいませんよ」

と懐爺は素っ気ない。

「いないのに、どうしてじしんがおきるんじゃ」

「それはわたしも見たことがないから、よくはわかりませんが、おそら
く土の下のまた下のほうで、土のかたまりが動いたり、火のかたまりが
揺れたり、水のかたまりが流れたりするからですよ。それを鯰のせいだ
なんて、鯰もいい迷惑ですよ」

「だから、そのうごかしたり、ゆらしたり、ながしたりするのは、なま
ずがやるんじゃないのかのう」

ぼくは鯰にこだわりたい。

「鯰はそんなことやりません」

やはり懐爺は素っ気ない。

どうもこの日の懐爺はおかしい。

いつもなら、

「それは【おおなまず】というおぼけです」

というはずなのですが。

「おおなまずなら、やりそうじゃがのう。だば、どいつがやるんじゃ」

「どいつといわれても。つまり地球は生きています。生きていますから、うんこをしたりおしっこをしたりします」

じつに適格なご意見。

「ちきゅうの、うんことおしっこが、じしんかい」

「まあ、そんなところではないかと」

「だば、とめられんのう」

「止められませんが、予告はできるかもしれません」

「うんこ、でそうじゃ、とか。おしっこ、もらしそう、とか」

「まあ、それを感知して、みなさんに予告することはできますね」

「だれがよこく、するんかのう」

「天変地異（てんぺんちい）を予告するおぼけとして、一番予告確率が高いのは【こくこく】ですね」

そんなおぼけがいたのか。

「どうして【よこく】でなくて【こくこく】なんじゃ」

「しりません。しってるわけありません。大昔から【こくこく】は【こくこく】ですから」

「そういうのは、こしょくそうぜん、というんじゃあるめいか」

「古色蒼然ですか。そんな言葉よくしっていますね。でもわたしは古い奴だとおおもいでござんしょうが、【こくこく】は【こくこく】でいいのではないかと」

「わしは、かいめいしてほしいのう。おおむかしのよびかたなんぞ、ききとうない」

というよりわかりにくい。

「それはまあしかし、ご本人の許可（きよか）も必要ですからねえ」

「きよかのう。かってに【よこく】とよんでいりゃ、そのうちに【よこく】になるめいかのう」

「それはなります。それでも元は【こくこく】であって、【よこく】はせいぜい渾名（あだな）扱いか宛字（あてじ）並みですがね」

「どうしてじゃ」

「伝統（でんとう）というものをないがしろにはしてはいけません。わたしたちは伝統の尖端（せんたん）で生きているのですから」

「むずかしいはなしじゃのう」

むずかしい場合は、そこでやめる。

「ともかく地震が怖かったら、【こくこく】におねがいするんですね」

「わしはこわくないがのう。となりのおねえさんがこわがったら、かわいそうじゃからのう」

「怖がらないのも問題ですね。怖がらないひとは、天変地異で死にますよ」

「だば、しかたないから、こわがるとすっか。それで、【こくこく】にはどうおねがいしたらいいんかのう」

「おまじないの言葉があります」

それを懐爺は教えてくれました。

こくこくこくこくこくこくこくこくよ
いっこくにこくでさんごくいちの
こくこくやいやいこくこくややや
てんぺんちいいいいいいつくるか
おしえてくれたらなまずをあげる
なまずおいしやほうやれほっとけ
ほっとけないのがてんぺんちいよ

「むずかしいのう。おぼえられんのう」

「紙に書いてあげますよ。でもおまじないをする前に、鯰を準備しておかないと。【こくこく】は鯰が大好物ですから」

「おおなまずかい」

「中鯰や小鯰で大丈夫です」

「だば、これからとってくるでのう」

ということで、ぼくは竹槍（たけやり）を手にして、村びとから〈夜叉が沼〉と呼ばれている小山の近くの小さな沼に行きました。

〈夜叉が沼〉にはだれも近寄りません。

昔（みんなの前でおならをしたのを苦にして）この沼に身を投げた村娘がいて、その娘が【やしゃ】にばけてでてくるといふ噂がありましたから。

しかしぼくはその娘に、（たとえ【やしゃ】であっても）会ってみたいとおもっていました。

そうして、こう伝えたかったのです。

「みんなのまえでおならしたから、じさつするなんて。わしなんか、ひゃっかいじさつせにゃならん。おまえはちつとも、はずかしいことなんかないんだから、もうやしゃにばけんでもええ。なんなら、ここで、おならがっせん、やるかのう」

けれども【やしゃ】はでてこないの、ぼくは鯰とりに精を出しました。

沼は小さいけれど、底なしといわれているので、足はつつこまない。

沼の縁からのぞいて、音をたてずに待つだけ待つ。

沼の面に泡がでてきたり波紋（はもん）がたったりしたら、そこをねらって、竹槍をくりだすのです。

鯰は底なしの泥の上層のなかにいて、竹槍は根元まで押し込まねばならず。少々危険なのですが、足元さえ小石で固めておけば大丈夫です。

鯰は大小二十ばかりとれました。

これらを雑草で泥を拭い、竹槍に串刺しにして担いでひきあげようとすると、沼のなかから声がきこえます。

「そんなにいっぱい鯰をとって、わたしを餓死（がし）させるつもりですか」

【こくこく】登場かと思つてみると、沼の中から現れたのは【やしゃ】でした。

とはいえ、容姿はかわいらしい娘なので【やしゃ】という呼び名は似つかわしくありませんが、ぼくはそれが【やしゃ】だとすぐに認識しました。

（後にぼくは石神井公園・三宝寺池の〈照姫伝説〉をしりましたが、そのときこのかわいらしい【やしゃ】のことを思い出したものです）

「なまずはおまえのごはんかい。だば、はんぶんかえすかのう」

じつはこのままでは担ぐのに重すぎたのでした。

そこで【やしゃ】に恩を売ろうとおもったのです。

でも見破られていました。

「恩を売るつもりでしょうが、わたしはもう気弱い心は捨てたのです。
その鯰ぜんぶ沼に返してください」

「だども、もういきてはおらんぞ」

「沼に返してくれれば、生き返らせます」

「だども、わしにもやることがある。それでこのなまずはひつようなん
じゃ。なまずとるのに、わしもくろうしたからのう」

「それなら、苦労賃として、一匹だけあげましょう」

「そのていどのおみやげで、【こくこく】はおしえてくれるかのう」

「大丈夫です。なぜならわたしが、その【こくこく】なのですから」

これにはおどろいた。

【こくこく】がおじさんかとおもっていたのは、先入観というやつで
した。

「それはしつれいいたしましたのう。それではさっそくでござりまする
が、こんどのじしんはいつくるのでやんすか。【こくこく】さまにおうか
がいいたしますじゃ」

敬語というものに慣れていないぼくは、冷汗（ひやあせ）と脂汗（あ
ぶらあせ）を流しながらいいました。

「そんなに大袈裟（おおげさ）に頼まれなくても、もちろん教えます。
そのために鯰たちと一緒にこの沼で暮しているのですから」

【やしゃ】いいえ【こくこく】は優しい声でいいました。

「はよおしえろ。さっさといわんかい」

しまった、地がでました。

それでも【こくこく】は教えてくれました。

「二十年後にこの村に、〈原子力発電所〉というものが作られます。通称
【げんぱつ】という、おばけよりもはるかにおそろしい巨大な施設です。
それが作られて、また二十年後に地震があります。けれども地震そのも
のよりも、地震によってその【げんぱつ】が破壊されるほうが、はるか
に恐ろしいのです」

ううむ、恐ろしい予告だ。

（ぼくはその後一度も、この予告を忘れたことはありません）

ぼくは【こくこく】に礼をいってから、懐爺のところに行きました。

【こくこく】の言葉を伝えると、

「金ちゃんは、大人になったら、【げんぱつ】反対の運動をする運命なの
でしょう」

懐爺はしみじみといいました。